PANN News Letter

Vol.05

Printmaker's Association of Nishi Nippon　　July 2005

● 会報第５号の発行によせて ●

今年はご承知の通り、京都での展覧会の開催年となっております。

中国、ブルガリアとの交流展に引き続き、今年はタイの版画作家との交流展を開催する運びとなりました。

今回の会報では、今年４月にブルガリアで開催されたブルガリア・日本国際版画展の報告を特集致します。

また、作家紹介では今年３月に平安画廊にて開催された『版画ＫＹＯＴＯ展実行委員会新鋭展』の出品作家である柴田真由美氏を取り上げました。

それぞれ、大変興味深い内容となっておりますので、是非じっくりと読んで下さい。

Shibata Mayumi

柴田　真由美

「宙～SORA～」
93cm×133cm　紙版／コラージュ
2005年

Contents

■会報第５号の発行によせて

■作家紹介　柴田　真由美さん

■ブルガリア報告
ーコウノトリは見ているー
田中　玉実

■公募展案内

■掲示板

■編集後記

作家紹介

Shibata Mayumi

柴田　真由美 さん

「作家活動とは何かを考える」をテーマに編集スタッフがお話を伺います。
今回は柴田真由美さんです。柴田さんは東京から京都へと移り、現在京都にて制作をなされています。色鮮やかなダイナミックで力強い作品は見ている人に感動を与えてくれます。

Q1. ご自身の作品について（テーマ、コンセプト等）
Q2. 作品を作る上で、1番大事にされている所はどんな所ですか？
Q3. グループ（団体）に所属して作品を発表する事について、どう思いますか？
Q4. 柴田さんは、制作の場を東京から京都に移されましたが、京都に移った事で、ご自身の作品に影響している事はありますか？また、作家活動を行う上で、京都と東京では違いはありますか？
Q5. 関西と関東の作家の作風や気質の違いなどはありますか？
Q6.今後の作家活動について、将来の夢など教えてください。

＜A1＞
自己の記憶の中にちりばめられたさまざまな自然界の光や影、無機質で単純なフォルムの断面を日常的な空間から解き放し、多次元的な流動空間へと表出させた時の、その一瞬の輝きやパワーを版画という手段によって、その感触をさらに明確に意識し表現することを追求しています。

＜A2＞
常に新鮮な感触をとらえられるように、自己の“五感”を研ぎ澄ませておくことを心がけています。モノのかたち、色彩、自然の発する力（パワー）を作品に映して、観る側にもそれをダイレクトに感じてもらえるような作品を意図して制作しています。

「天泣」
93cm×133cm
紙版／コラージュ
2005年制作

＜A3＞
私は昨年より日本版画協会の準会員になりましたが、なんといっても展覧会時の観客数が多い事が強みだと思います。団体展に限らず、公募展等に入選し、作品が展示されることによって思わぬ所から声がかかり、展覧会の機会を頂いたりすることがあります。また、沢山の作品と対峙することによって今後の目指すべき方向を見付けるヒントにもなります。様々な世代や地域の作家との交流による情報交換、そしてそれによって新しい技術・技法や人脈を広げるのにも役立っています。
それから団体に所属しているということで、「版画家」としてのステイタスの向上という点も作家にとって大事な要素の一つかもしれません。将来的にも作家活動を続けていくという証にもなり、作品を購入してくださる方への安心感にもつながります。そして作家の方にもプロ意識が芽生えるので、メリットはあると思います。

＜A4＞
３年程前、結婚を機に京都市内に移住しました。京都は作家活動に対して理解があり、また社会的にも作家の地位が確立している土地柄ですので、東京より制作し易く、とても恵まれた環境だと思います。京都には常に何かに追われているような焦燥感をうち消し、初心に返ってゆっくりと自分を見つめ直す“時間”がありました。その流れ方が東京とは全く異なるのを日々実感しています。こちらでは少し肩の力を抜いてじっくり制作に打ち込めるようになりました。この環境の変化によって今後作品がどのように変わっていくか、自分自身とても楽しみです。

＜A5＞
関西は個性的で先進的な作風、例えばCGや写真の技法を取り入れたような作品があまり抵抗無く受け入れられる土壌があるように思います。関東の方でも新しい技術やメディアを用いて版画作品を制作する作家はおりますが、逆に版画のジャンルから飛び出して、もっと広い意味での芸術活動（インスタレーションなど）の方向に展開していく方が大半です。関東の版画作家は意外と保守的なこだわりを持っている方が多いです。一方、関西では技法や技術等にあまり固執することなく、楽しみながら作品を制作している作家が多く、自由な空気を感じます。

＜A6＞
関西を中心に展示する機会を多く持ちたいと考えています。また同時に公募展等にも積極的に出品していくつもりです。そして、より的確な自己表現の手段としての版画を常に模索しながら、一歩ずつ前進し続けていきたいと思います。

「CIPHER」
100cm×130cm
紙版
2004年制作

プロフィール

1971年	東京都生まれ
1994	多摩美術大学絵画科油画専攻版画専修卒業
1995	多摩美術大学研究生修了
1997	多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻版画専修修了
2002	結婚後、京都市内に移住　柴田姓に改姓（旧姓：大場）

主な活動

1994 年	第 62 回日本版画協会 ... 以降 '00〜'02 を除く毎年
	全国大学版画展＜買上賞・観客賞＞
	第 4 回 ARTBOX 大賞展
1995	第 5 回 ARTBOX 大賞展＜ギャラリー賞＞
	第 4 回プリンツ２１グランプリ展
	第 1 回国際ミニプリントトリエンナーレ
1996	韓国国際大学交流展（弘益大学／ソウル）
	２０代の木版画展（ギャラリー伸／銀座）
	第 16 回天理ビエンナーレ
	都版画賞展
1997	第 5 回プリンツ２１グランプリ展
	個展（世田谷美術館ギャラリー／世田谷）
2000	Print seed 展（ギャラリー神宮苑／表参道）... 以降毎年
	版画３０年展（多摩美術大学美術館／多摩センター）
2003	KYOTO 版画２００３＜奨励賞＞
	第 3 回池田満寿夫記念芸術賞展
2004	第 72 回日本版画協会展＜賞候補・準会員推挙＞
	京展２００４＜京展賞＞
2005	京都府美術工芸選抜展２００５＜京都府買上＞

ブルガリア報告　ーコウノトリは見ているー

田中　玉実

「ヨーグルトの国だよね。どこだっけ？」と誰もが聞く。４月初め、余震が続く福岡を後にして、行ってきました春まだ浅きブルガリア。総勢17名。トルコ、ギリシャ、マケドニア、セルビア・モンテネグロ、ルーマニア、そして黒海に囲まれた東欧の小国。過去にはローマに、トルコに、ロシアにと複雑な被支配の歴史を持つ。「知恵」という意味の首都ソフィア、「すてきな都市名だねー」。

さて到着翌日ソフィア、白亜のシティアートギャラリーで行われたブルガリア・日本国際版画展は、何故かブルガリアの作品展示が無かったのが残念だったが、力作９８点、なかなかの圧巻だった。夜、オープニングパーティには、どこから湧き出たのか、「200～300人はいるかなー」（村井氏言、大げさか？）。テレビカメラが3、4台。女性館長さん、さらに去年日本に来られたルーメン・スコルチェフ教授と黒崎彰先生のご挨拶の後、作家紹介。日頃、図太い中年主婦を自認する私だが、「田中玉実先生です」と黒崎先生に紹介され、頭がくらっと、でもちょっといい気分。

会場で話したり、名刺交換したブルガリア人は、詩人、文学部教授、建

写真①

築関係、インテリア関係の人など、なんだか支離滅裂だが皆さん熱心に見てくださっていた。

その晩、国立歌劇場最上階のレストランで開かれた歓迎会で、スコルチェフ教授の奥様エリーさんと席がお向かいになった。きりっとしまった顔立ちについ、「お仕事はなさっているんですか？」。「ラジオ局で働き、政府の広報を担当しています」。具体的にどんなことをするのか、さっぱり理解できなかったが、ばりばりキャリアウーマンの印象。でも最後に、「夫が一番大切です」と男性を立てるあたり、我が家に似ている（反論の声、少々あり）。

翌日、別のギャラリーの招待を受け、ブルガリアの作家との交流、そこでお昼をごちそうになる。言葉の壁は大きい。午後、黒崎先生が『日本版画の歴史』について講演。ここでも多くの聴講生。日本は人気があるのかしら？

黒崎先生といえば、ソフィアに着いて以来、ピッタリ寄り添うブルガリア女性あり。名はルーシー、今ではやや肉がだぶつき気味だが、「昔はスラリとした美人だった」（黒崎先生言）とか。親切にも、彼女がおいしいレストランに連れていってくれたり、いろいろ私たちの世話をしてくれた。これもすべて黒埼先生の魅力によるものと直感した私、「関係は？」「出会いは？」と鋭く先生を追及。この紀行文も、『黒崎彰とルーシーの出会い』とか『世界を制する黒崎彰の魅力』なんてのにしたら、もっと面白いのが書けそうだけど、まーそれはまたの機会にして…。（先生ごめんなさい）。いずれにせよ、今回のレセプションで、黒埼先生の大きさ、深さ、強さを実感したのだった。

そして私たちは、ブルガリア観光旅行へと旅立った。おっとその前にブルガリア料理。食を見れば、その国の文化、経済がよくわかる。まずはサラダの定番、ショプスカ・サラダ。トマトときゅうりに癖のない白チーズがたっぷり。ほとんど毎日これを食べた。ヨーグルトとチーズの国、どうも農業は苦手のよう、政府の政策も悪いのだろう。メインはほとんど挽肉料理、見た目も味もトルコに似ている。挽肉や卵などをチーズに載せて焼いた料理、ムスカは癖がなくとてもおいしい。ビールもワインもいい感じ。でもブルガリア人は、ブドウやプラムから作ったラキアという焼酎を飲むという。40度を生で。これを毎晩頼んでいたのは井上さん。滑らかな舌がますます滑らかに。ともあれ、食べられないのを懸念して日本から

写真②

持っていったごはん、しょうゆ、カップラーメンなどは全く無用であった。（カップラーメンはルーシーにプレゼント。食べられたかな？）

いよいよ観光。一度聞いたら忘れられない名前。我らが添乗員「つぐみさん」は、非常に有能だった。英語のガイドを彼女が同時通訳する。ここブルガリアは正教会、教会は色彩豊かなイコンで彩られている。世界遺産のフレスコ画が残る外壁も素朴で美しいボヤナ教会、リラ山の奥深く華麗にたたずむリラの僧院。そしてブルガリアの歴史そのままに、ローマ帝国の遺跡やオスマン朝の建物が残る石畳の街プロヴディフ。予算が足りないそうで整備はまだまだだが、素晴らしい遺産だ。「民主化されて数年、ロシアから離れてかえって経済は落ち込んでいる」と、ガイドさん。「確かに、そう言われれば…」。バスの窓からは、連なる山々に手入れされていないやせた林、ゴミが気になる牧草地。村では、わずかな庭にぎりぎりまでブドウ畑を作っている家々。ロバが荷を運んでいる農村。のどかだが、豊かとはいえない暮らしがうかがえる。ちょっとせつない。

写真③

でも私たちを一瞬にして幸せな気分にした町がある。リラの僧院に向かう途中のコチュリノボ、ここでは家々の屋根の古い大きな煙突に、コウノトリが見事な巣を作り子育てをしている。家のてっぺんで、風見鶏のように、首をりんともたげて世を見渡している。空気のきれいな所にしか住まず、愛情深い鳥という。「ワァッ」。それは、白黒のくっきりとした羽をパーッと広げ、悠然と頭上を渡っていった。鶴に似ている。誰もが笑顔。目に焼きついて忘れえぬ光景となった。

さて旅は続く。ブルガリアのど真ん中、カザンラクへ。バラの木一本見当たらないバラの谷で、おみやげにバラの香水（世界市場の８割を占めているとか）をたっぷり買い込み、いい香りを乗せて、さらにバスはバルカン山脈を越え（ついに出た！途中寄ったシプカ峠のトイレは恐ろしいものだったなー）、古都ヴェリコ・タルノボへ。

えっ、どんなトイレか聞きたいって？　薄暗い、足の乗せ場だけの、どっちをむいていいかわからない、手洗い場にあるバケツで水を汲んで流すトイレ。トイレ番のおじさんに今までで一番高いお金を払ったのに。数枚

の紙がもらえたけど。（ここ以外はどこも水洗が行き届いていた）。ところで峠で食べた水牛のヨーグルトはとてもおいしく、黒崎先生の真似をしておみやげに買った。

中世の面影をたっぷり残すヴェリコ・タルノボは、ルーマニアにも近いとあって、この旅で初めて本格的ヨーロッパの観光地を訪れた感じ。それにしても、ブルガリアは初めてだという、まだうら若きつぐみさんの能力の高さにはビックリ。で、「すごいねー。その語学力とフォローのきめ細かさ、感服しちゃう。出会えて本当にうれしいわ。ところで独身？それとももう結婚されてるの？」。するとつぐみさん「バツイチなんですよ」。まったくおせっかいなおばさんでした。

往時がしのばれる、第二次ブルガリア帝国の宮殿の跡が残るツァレヴェッツの丘から、タルノボを一望するすばらしい眺め。蛇行して輝くヤントラ川の向こうに、家臣が住んだというなだらかな緑の丘、段状に建ち並ぶ白い家々の美しさ。しばしうっとり。さて旅の定番、立ち並ぶおみやげ屋を楽しんで、近郊の村アルバナシへ。

日本人も終の棲家として移り住んでいるというアルバナシには、オスマン朝の時代の豪商の家が立ち並び、さながら地上の楽園。石垣の向こうに、真白いアーモンドの花が咲き乱れていた。ここでスリにも遭遇し、スリルを味わう。そして私たちは、ブルガリア最後の夜を過ごすべく、ソフィアへ戻っていくのであった。

途中、食事で同席させていただいた田島征彦さん。（私は「ユキちゃん」と「ヘデコさん」の大ファンなのです）。新作絵本の話を聞いて、皆で大笑い。その後、もらされた一言。「この旅で新しい版画のモチーフを見つけたよ」。これには「ガーン！」。すっかりミーハー主婦になりきっていた私。そういえば２年前、中・日国際版画展で西安を旅した時も、山本桂右さんが「旅行中はいつも版画の題材を探している」とおっしゃっていたのを思い出した。作家たるもの、そうでなくちゃいけなかったと深く反省。が、時すでに遅し。

夜、ソフィアのホテルでルーシーを囲み、最後の別れ。「ブルガリアのことをどう思う？」と聞かれとまどっていると、「自由の国になったとはいえ、まだまだ共産党の名残は強く、上層部の腐敗、搾取がひどいのよ」とルーシーは嘆いた。確かに東欧の国々のなかでも、ずいぶんと出遅れた感のブルガリア。それでも２００７年にはEUに加盟の予定だ。文化も経済も急加速の予感。うまく乗り切ってくれたら…、そんな思いを胸にブルガリアを後にした。

芸術と物にあふれたウイーンで楽しむこと、２日間。この成熟した都市に比べて、ブルガリアの未熟さを思わずにはいれなかった。かってに親戚の子供の幸せを祈るような感情を抱いた私。コウノトリも見守っている。ブルガリアの自由と平和の日々を…。

写真①左　シティーアートギャラリー館長
　　中央　田中玉実
　　右　スコルチェフ婦人
写真②リラの僧院
写真③コウノトリ

公募展案内

（詳細を知りたい方は、募集要項をお取り寄せ下さい。）

■第３回山本鼎版画大賞展■

＜応募期間＞平成17年７月１日(金)～８月31日(水)
＜搬入期間＞平成17年９月22日(木)～９月24日(土)
＜応募規定＞
＊平成16年以降に制作した作品＊一人１点＊額の大きさ110cm×100cm以内とする。また、額の厚さは10cm以内とする。平面作品とする。額装し、展示可能な紐をつける。(アクリルは可、ガラスは不可)。
＜会期＞平成17年10月30日(日)～11月13日(日)
＜会場＞上田創造館 文化ホール（長野県上田市上田原1640）
＜賞＞大賞 １点 100万円（買い上げ）と賞状
　　準大賞　２点30万円（買い上げ）と賞状
　　サクラクレパス賞　１点10万円と賞状
　　佳賞　５点 5万円と賞状　／　入選　150点程度　図録と賞状
＜出品料＞１人 5,000円　（１人１点に限ります。）
＜募集要項、お問い合わせ＞
上田市山本鼎記念館内「山本鼎版画大賞展」係
TEL&FAX：0268-22-2693　／　Eメール：kanae.y@city.ueda.nagano.jp
URL：http://museum.umic.ueda.nagano.jp./

■第１０回浜松市美術館版画大賞展■

＜直接搬入＞平成１７年１１月１９日（土）・２０日（日）
＜委託搬入＞平成１７年１０月１７日（月）～１１月７日（月）必着
＜応募規定＞２年以内に制作した平面作品。１人２点以内。１点の総重量１０kg以内。額装（ガラス不可。アクリル可）し、展示可能な装備をしてください。（但し、額装後の外寸法が縦１２０cm×横１２０cm以内）
＜会期＞平成１８年１月４日（水）～２月１２日（日）
＜会場＞浜松市美術館
＜賞＞大賞１点３０万円、静岡新聞社賞１点２０万円、ほか。
＜応募要項・問い合わせ＞浜松市美術館　〒４３０－０９４７　静岡県浜松市松城町１００－１
＜TEL＞０５３－４５４－６８０１

掲示板

会報にお寄せいただいた京都版画展の出品者の展覧会、活動情報です。詳細は会場等へお問い合わせください。

●黒崎　彰●
＜展覧会＞
会期：2005年５月５日（木）～１０月３０日（日）
場所：北武記念絵画館
　　札幌市豊平区旭町1丁目1-36
TEL　：011-822-0306

●柴田　真由美●
＜版画展＞
会期：2005年１１月１６日(水)～２９日(火)（最終日17時閉場）
場所：大丸京都店　6Fアートスポット
　　京都市下京区四条高倉西入
TEL　：075-211-8111

●ツツミ　アスカ●
＜展覧会＞
会期：2005年１１月２８日（月）～１２月４日（日）
場所：十一月画廊
　　東京都中央区銀座７-１１-１１長谷川ビル３F
TEL　：03-3289-8880

● 二階　武宏●
＜木口木版七人展＞
会期：2005年９月５日（月）～９月１４日（水）
場所：ミウラアーツ
　　東京都中央区銀座8の12の6 小野商ビル401
TEL　：03-3541-1327

＜二階武宏木口木版展＞（第73回日本版画協会受賞者企画展示）
会期：2006年 ２月１４日（火）～２月２６日（日）
会場：平安画廊
　　京都市中京区寺町通り三条上ル
TEL　：075-231-0694

●福岡　舞子●
＜ART CAMP in kunst-bau＞
会期：2005年９月１０日～２２日（第4期）
　　OPEN: 11:00-18:00（日、祝休）
場所：大阪市港区海岸通1-5-25 商船三井築港ビル　地階
TEL　：06-6577-0998

編集後記

この号から、会報担当者が二階委員から楢木委員に代わりました。堤、福岡は引き続き担当のままです。さて、会報担当者が代わって第２号目の発行となりました。前回に比べると少しは編集作業にも慣れたように思いますが、やはり会報の内容が興味深いものになったのは、原稿を依頼させて頂いた方々、各種情報をお寄せ頂いた方々のおかげだと大変感謝をしております。次回の発行は半年後を予定しています。皆さんからのご寄稿や、展覧会情報などを広く募集しておりますので、どしどしお寄せ下さい。それでは、今後とも宜しくお願い致します。尚、掲載希望の記事、情報等の送り先も代わります。お間違えの無いようご注意下さい。
会報担当一同